

中英語の文否定の発達に関する一考察

古川 允也

(関西学院大学大学院)

1. はじめに

本論では、英語史における文否定の発達について、特に、中英語に観察された否定呼応 (negative concord) の出現と消失のメカニズムについて論じる。また、同じ中英語期に特定の動詞の補部節内で観察された余剰な否定辞 *ne* の派生について説明を試みる。まず、否定呼応とは、古英語から初期近代英語にかけて観察され、2 つ以上の否定要素が 1 つの節中に現れた際、それらの否定の解釈が打ち消し合って肯定の意味になるのではなく、単純に 1 つの否定の解釈を表す表現である。

(1) *I ne seye not.*

(Jespersen (1927:427))

(1)では、動詞 *seye* の前後に否定辞 *ne* と *not* が現れているが、これらの否定辞は 2 つで 1 つの否定の意味を表している。一方、現代英語では、否定呼応は容認されず、2 つの否定辞の解釈が相殺され二重否定の解釈となる。本論では、先行研究のデータと史的コーパスを使った調査より、英語史における否定呼応の出現時期と消失時期について明らかにする。また、否定呼応の出現と消失のメカニズムについて、Chomsky (1995)以降の極小主義モデルの文法理論に基づいて、構造分析を行う。

否定呼応には、(2)に示すような、否定主語と否定目的語などが現れるものもある。

(2) a. *for þere ne doð no man riht.*
 for there NEG does no man right
 ‘for there no man does the right thing’

(CMTRINIT-MX, 211.2937)

b. *and ne bideþ he æt us nænig oþor edlean*
 and NEG asks he at us NEG.any other recompense
 ‘and he asks of us no other recompense’

(HomU 19 (BlHom_8) 103.115)(cf. 柳 (2022: 347-348))

(1)のような否定呼応は 1400 年頃に消失するが、(2)のようなものは 17 世紀初頭でも観察されたと言われている (宇賀治(2000))。これらの否定呼応は消失の時期が異なっているため、発達過程や出現・消失のメカニズムが異なっていると考えられ、区別して議論され

るべきである。したがって本論では、(1)の *ne not* タイプの否定呼応に焦点を当て、(2)のような事例は別に論を改めることとする。

また、本論では、(3)に示す余剰な否定辞 *ne* についても論じる。

- (3) *ne doute the nat that alle thinges ne ben don aryght*
 NEG *doubt you not that all things ne are don rightfully*
 ‘Do not doubt that all things are done rightfully’

(Chaucer’s *Boethius* IV P5:49) (Wallage (2008: 671))

(3)では、否定 *nat* を伴う主節動詞 *doute* の補部節内に否定辞 *ne* があるが、この *ne* は意味解釈に貢献しない。Wallage (2008)では、否定呼応の *ne* と余剰の *ne* に対して同じ認可条件を用いて分析を行っている。ここでは、Wallage (2008)の分析には問題点があることを指摘し、本論での独自の分析を提案する。

本論の構成は以下のとおりである。まず、2 節では、英語史における文否定の変遷について、*The Jespersen Cycle* に沿って概観する。3 節では、(1)の否定呼応に関する先行研究である Frisch (1997)と Wallage (2008)の調査・分析を概観し、それらの問題点を指摘する。4 節では、本論での分析を提案する。5 節では、否定辞 *ne* の消失時期をコーパス調査から明らかにし、6 節では結語である。

2. 英語史における否定辞の変遷

本節では、英語史における否定辞の変遷過程を記述した *The Jespersen Cycle* を概観する。*The Jespersen Cycle* とは、(4)に示すように、様々な言語における否定の表現が歴史的に発達したことを説明するものである。

(4) Jespersen’s negative cycle

Stage 1: negation is expressed by one negative marker

Stage 2: negation is expressed by a negative marker in combination with a negative adverb or noun phrase

Stage 3: the second element in stage 2 takes on the function of expressing negation by itself; the original negative marker becomes optional

Stage 4: the original negative marker becomes extinct (Kemenade (2000: 56))

Stage1 では、否定は 1 つの否定辞のみによって表される。Stage2 では、否定辞は、否定副詞や否定名詞句などの否定辞と結びついて否定を表すようになる。Stage3 では、Stage2 での 2 つ目の否定辞が、そのみで否定を表す役割を担うようになり、最初の否定辞は任意となる。Stage4 では、最初の否定辞は完全に消滅する。

英語の否定辞に関する *The Jespersen Cycle* を扱った先行研究には、Ishikawa (1995), Fischer et al. (2000), Kemenade (2000), Ohkado (2005) などがあり、これらの先行研究

は、英語の文否定の発達を、以下のようにまとめている。

- (5) (a) : ic ne secge (nawiht/naht). [OE]
 (b) : I ne seye not. [ME]
 (c) : I say not. [c. 1400~]
 (c') : I not say. [1400-a. 1700]
 (d) : I do not say. [16c~]
 (e) : I don't say. (Ishikawa (1995: 198))

(5a)は、否定辞 *ne* が単独で用いられた古英語期の文で、*ne* は定形動詞 *secge* に先行している。(5b)は否定呼応の例で、中英語に観察される代表的な文否定の例である。ここでは否定要素 *ne* と否定副詞 *not* が共起して、それら 2 つで 1 つの否定の意味を表す。14 世紀頃になると、(5c) ((5c')) のように、*ne* は次第に脱落するようになり、その結果、*not* が通常の否定語の役割を担うようになった。15 世紀初めに助動詞 *do* が導入され(5d)が出現し、17 世紀にはいと *not* が縮約された(5e)が出現した。

また、*ne* の消失時期について、Jespersen は、*ne* が完全に消失して、*not* を中心に使用するようになったのは 15 世紀であると述べており、Ishikawa (1995)も、*not* のみで否定文を表すようになったのは、15 世紀頃からと述べている。一方、Nevalaine (1997), Wallage (2012)などでは 16 世紀まで *ne* が観察できると述べており、先行研究の間で意見が一致していない。*ne* の消失時期については、5 節で詳しく議論する。

最後に、本論で扱う否定呼応の事例を以下にあげておく。

- (6) a. Ne bið na se leorningniht furðor þonne his lareow
 not is not the apprentice further than his master
 'The apprentice is not ahead of his master'
 (ÆCHom 14.134) (Fischer et al. (2000: 55))
- b. yet ne wolde he nat answare soðeynly
 yet not wanted he not answer suddenly
 'yet he did not want to answer suddenly'
 (Chaucer *Melibee* 1032/2222) (Wallage (2012: 10))

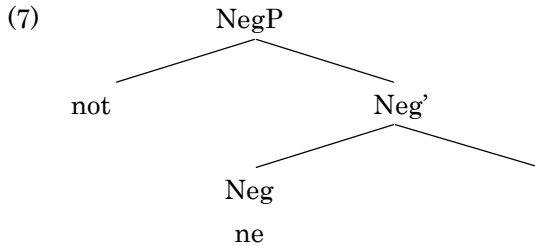
(6a)は古英語の否定文で、否定辞 *Ne* と *na* (=not)が、1 つの節に共起している。(6b)は中英語からの例で、ここでも否定辞 *ne* と *nat* が同じ文中に現れているが、互いに相殺して肯定文にならず、単一の否定の解釈を表している。

3. 先行研究

本節では、英語史における否定呼応の変遷に関する先行研究である Frisch (1997)と Wallage (2008)の分析を概観し、これらの問題点を指摘する。

3.1. Frisch (1997)

Frisch(1997)は、2節の(5)で概観した否定の The Jespersen Cycle に対して、余剰な認可モデル(redundant licensing model)という説に基づいて、説明を試みている。具体的には(7)の樹形図に示すように、否定辞 *ne* は Neg 主要部を占め、否定辞 *not* は NegP 指定部を占めると仮定し、(2b)でみた *ne ... not* の例は、これらの否定辞が二重に NegP を認可していると考えている。



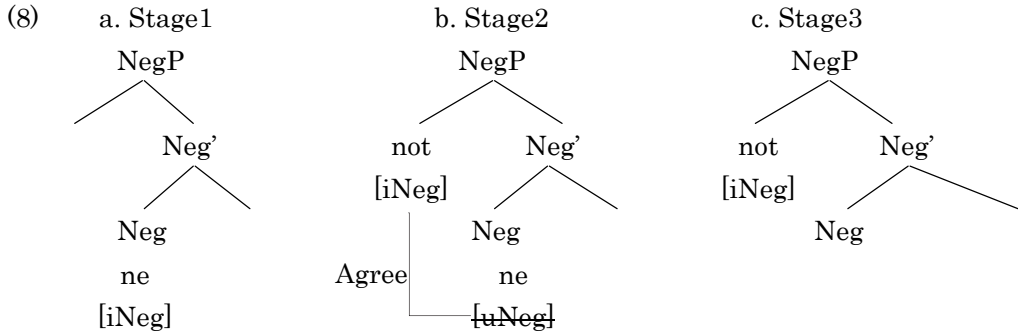
Frisch は、否定の発達にはまったく別の独立した 2 つの変化が関与していると主張している。すなわち、Neg 主要部における *ne* の消失と、*not* の付加部から指定部要素への再分析である。*ne ... not* は、*not* が導入された時点ではまだ *ne* が消失せずに残っていた時期に観察されたものであると主張している。

しかしながら、Wallage (2008)によれば、Frisch (1997)の分析には理論的・経験的な問題がある。Frisch の余剰認可モデルでは、*ne ... not* という 2 つの否定辞が共起する形式であったとしても、*ne* と *not* は完全に独立したものであるとみなされる。しかし、このような仮説は、*ne...not* という形が、単独で現れる *ne* や *not* とは構文的にも分布的にも異なっているという可能性を曖昧にしてしまう。また、Frisch は、余剰認可モデルに基づいてコーパスデータを収集している。*ne* と *not* は完全に独立していると考えているので、*ne* と *not* の出現する確立を掛け併せて算出したものを期待値として定め、その期待値に基づいて分析を行っている。しかし、Wallage(2008)が実際に観察される *ne ... not* の数を確認したところ、観察された数と Frisch の期待値により算出された数には大きな差異があることが明らかになった。ⁱ Wallage (2008)は、Frisch(1997)の余剰認可モデルに基づくデータの収集方法にも問題が残ることを指摘している。

3.2. Wallage (2008)

Wallage (2008)は、否定の The Jespersen Cycle に対して、統語素性を用いた形態統語的な観点から説明を試みている。まず、Rowlett (1998)や Chomsky (2000)を採用して、否定の意味解釈に貢献するのは *ne* か *not* が持つ [iNeg] 素性であると仮定している。ⁱⁱ さらに Chomsky は、意味解釈に貢献しないが統語操作を引き起こす形式素性があると仮定し、Wallage (2008)は、否定の発達に [uNeg] という形式素性が関与していると仮定している。Chomsky (2000)は、[uNeg] のような値を持たない解釈不可能素性は Probeⁱⁱⁱ となりその探査領域にある対応する解釈可能素性と一致(Agree)し、値を受け取り削除されなければな

らないと仮定している。仮に、値が与えられないまま解釈部門である LF に転送されると、解釈されないものが LF に存在することになってしまい、派生は破綻する。Wallage (2008) は、Rowlett (1998) と Chomsky (2000) を採用して、否定の発達を次の (8) の樹形図に示すようなものであると主張している。



(8)は、否定の The Jespersen Cycle の Stage1～Stage3 を樹形図で表したものである。ne 単独で文否定を表す Stage1 では、(8a)に示すように、Neg 主要部は ne によって占められており、この ne は [iNeg] 素性を持ち否定の意味解釈に貢献する。(8b)の ne と not が共起する Stage2 では、Neg 主要部の ne に加えて、not が NegP 指定部を占めるようになる。この段階になると、主要部 ne は否定の意味解釈に貢献しなくなり [uNeg] 素性を持つようになる。その代わりに、not が NegP 指定部に導入され、not が持つ [iNeg] 素性が否定の意味解釈に貢献する。また、Neg 主要部にある ne は [uNeg] 素性であるため、LF に入る前に統語部門で削除されなければならない。(8b)に示すように、not の [iNeg] 素性と ne の [uNeg] 素性が一致して、[uNeg] 素性は削除される。(8c)に示すように、Stage3 になると、ne は完全に消失し、[iNeg] 素性を持つ not のみが存続するようになり、not のみで否定の意味解釈を表すようになった。

Wallage (2008)は、(8)の否定の発達に加えて、中英語後期に観察される余剰な否定辞の ne の認可を説明する際にも、同じシステムを採用している。中英語に観察される余剰な ne を伴う例を以下にあげる。

- (9) ne doute the nat that alle thinges ne ben don aryght
 NEG doubt you not that all things ne are don rightfully
 ‘Do not doubt that all things are done rightfully’
 (Chaucer’s Boethius IV P5:49) (Wallage (2008: 671))

(9)では、主節に否定の nat があり、補部節にも否定辞 ne がある。しかし、補部節内の ne は意味に貢献しない。それゆえ、Wallage (2008)は、この余剰な ne は [uNeg] 素性を持つと仮定し、この [uNeg] 素性は、主節の否定辞 nat が持つ [iNeg] 素性と一致して削除されると主張している。

しかしながら、Wallage (2008)の分析には 2 つの理論的問題が残るように思われる。1 つ目は、Probe の探査に関する問題である。すなわち、Probe となる値を持たない素性は、Goal となる値を持つ素性と一致しなければならないが、Probe が Goal を探査できる領域は Probe よりも構造的に低い位置である。しかし(9)では、Probe である *ne* の[uNeg]素性は *doute* の補部節内にあり、Goal である *nat* の持つ[iNeg]素性は構造的に Probe の[uNeg]素性より上位の主節にある。Chomsky (2000)の一致システムでは、Probe と Goal はこのような構造関係において一致することは出来ない。そこで Wallage (2008)は、Zeijlstra (2004)の一致システムを採用して、同じ統語領域にある関連する素性は全て一致できると仮定している。つまり(9)では、主節と補部節の 2 つの CP が統語領域としてみなされ、その統語領域に含まれる余剰の *ne* の[uNeg]素性と *nat* の[iNeg]素性は一致関係に入ることができると主張している。しかしながら、Wallage (2008)のこのような仮定はその場限りのものであり、(9)で観察される余剰な否定の素性の一致において、逆方向の探査が本当に認められるのかについては問題が残るように思われる。

もう 1 つの問題は、次の(10)のような後期中英語以前の余剰な *ne* が持つ素性についてである。

- (10) Jesus hire þo for-bed þat heo attryne ne sceolde his hond
 Jesus her though forbade that she bind ne ought his hands
 ne his fet
 or his feet
 ‘though Jesus forbade her to bind his hands or his feet’

(ca. 1275 Passion 581 in OE Misc:53)(Wallage (2008: 665))

(10)は初期中英語の事例で、主節の *forbid* の補部内に余剰な *ne* が現れている。この時期の余剰な *ne* は、主節に否定辞が無くても現れることができた。一方、(9)のような後期中英語では、余剰な *ne* は否定の作用域内に現れ認可される必要がある。余剰な *ne* は意味解釈に貢献しないので[uNeg]素性を持つと考えられる。この[uNeg]素性は対応する[iNeg]素性と一致関係に入り削除されなければならない。しかしながら、(10)に示されるように、[iNeg]素性を持つ語がどこにもないため、[uNeg]素性は一致関係に入ることができず削除されないまま残ってしまうという問題が起こる。仮に、余剰な *ne* が、一致関係に入る必要のない[iNeg]素性を持つと仮定したとしても、その場合には *ne* が否定の意味解釈に貢献してしまうこととなり、本来の文の意味解釈とは異なってしまうという問題が残る。

ここでは、主に Frisch (1997)と Wallage (2008)の分析を概観しそれらの問題点を指摘した。続く 4 節では、これらの問題点を克服できる否定辞繰り上げと *ne* が持つ意味解釈の素性に基いた独自の分析を提案する。

4. 提案

3 節では、Frisch (1997)と Wallage (2008)による否定の発達とその分析を概観し、それ

らには問題があることを指摘した。本節では、中英語における否定の史的発達に関する独自の分析を提案する。具体的には、(11)に示される、英語の否定の史的変化に構造分析に基づく説明を与える。

- (11) (a) : ic ne secge (nawiht/naht). [OE]
 (b) : I ne seye not. [ME]
 (c) : I say not. [c. 1400~]
 (d) : I not say. [1400-a. 1700]

(cf. Ishikawa (1995: 198))

3節の先行研究で概観した(11a-c)の語順に加えて、(11d)の not が動詞に先行する語順についても構造分析を行う。(11d)の語順は中英語では非常に稀で、(11c)の方が規範的なものであったと言われており、Jespersen (1917)などでは扱われていない。Mizoguchi (2007)によれば、(11d)は 15 世紀に出現したがシェイクスピアの時代には廃れた。また、(12)に再掲する、Wallage (2008)の分析で問題となった(9)と(10)の余剰な ne を含む否定文についても独自の分析を提案する。

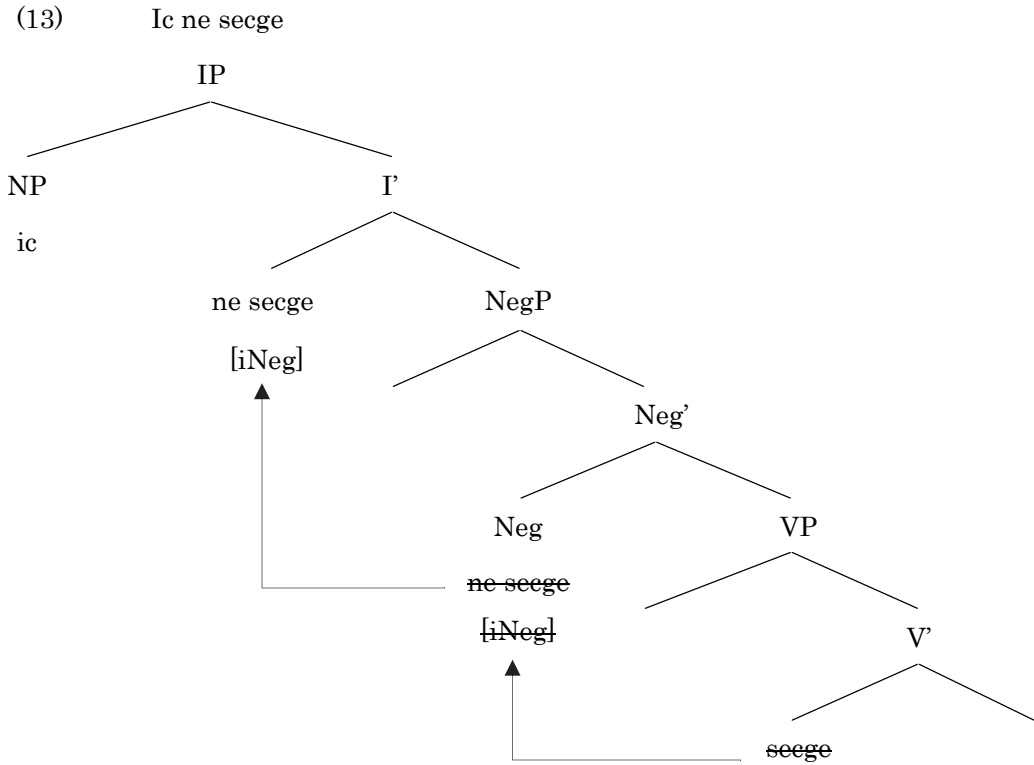
- (12) a. Jesus hire þo for-bed þat heo attryne ne sceolde
 Jesus her though allow not that she bind ne ought ~~not~~
 his hond ne his fet
 his hands or his feet
 ‘though Jesus forbade her to bind his hands or his feet’
 (ca. 1275 Passion 581 in OE Misc:53)(cf. Wallage (2008: 665))
- b. ne doute the nat that alle thinges ne ben don aryght
 NEG doubt you not that all things ne are don rightfully
 ‘Do not think that all things are not done rightfully’
 (Chaucer’s Boethius IV P5:49) (Wallage (2008: 671))

まず、Frisch (1997)や Wallage (2008)、Zeijlstarra (2004)らに従って、否定文には NegP が IP と VP の間に存在し、NegP 主要部に ne が NegP 指定部に not が現れると仮定する。さらに、Rowlett (1998)や Wallage (2008)に従って、否定の解釈は ne か not が持つ [iNeg] 素性によって表され、ne が持つ否定の素性は中英語期に変化したと仮定する。具体的には、(11a)のように ne が単独で否定を表していた時期は、ne は [iNeg] 素性を持っていた。中英語の初めに ne が持つ素性が値未付与の [uNeg] に変化すると、[iNeg] 素性をもつ not が NegP 指定部に導入され、(11b)のような否定呼応の事例が観察されるようになる。ne の持つ [uNeg] は、not の [iNeg] と一致して値を与えられ削除される。やがて ne は消滅し、(11c) と(11d)のように not のみで否定を表すようになる。Wallage (2008)では、否定文全体の構造分析がなされていないので、以下では、(11)で挙げられている否定文に対して、ここで

の統語的枠組みを用いて樹形図で説明を与える。

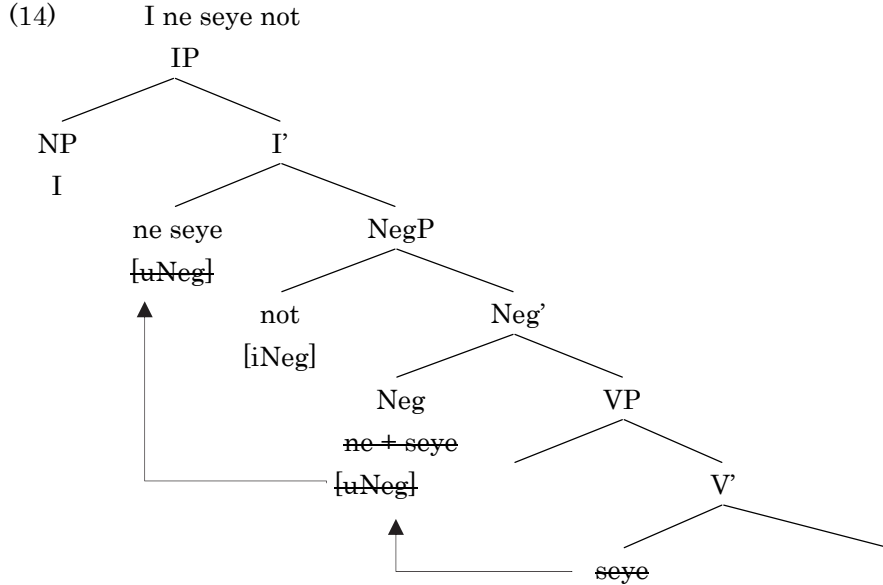
また、ここでは否定辞の *ne* は接辞的要素であったと考える。古英語から中英語にかけて否定辞 *ne* が使われる場合、主語+*ne*+動詞の語順が規則であり、原則的に否定辞の *ne* は動詞の前に現れなければならなかった。本論では、否定辞 *ne* が接辞的であったため動詞と隣接しなければならなかったと考える。V 主要部に基底生成された動詞が、Neg 主要部に繰り上がり、*ne* と隣接すると仮定する。

まず、*ne* のみで否定を表す(11a)の構造は以下のようなになる。



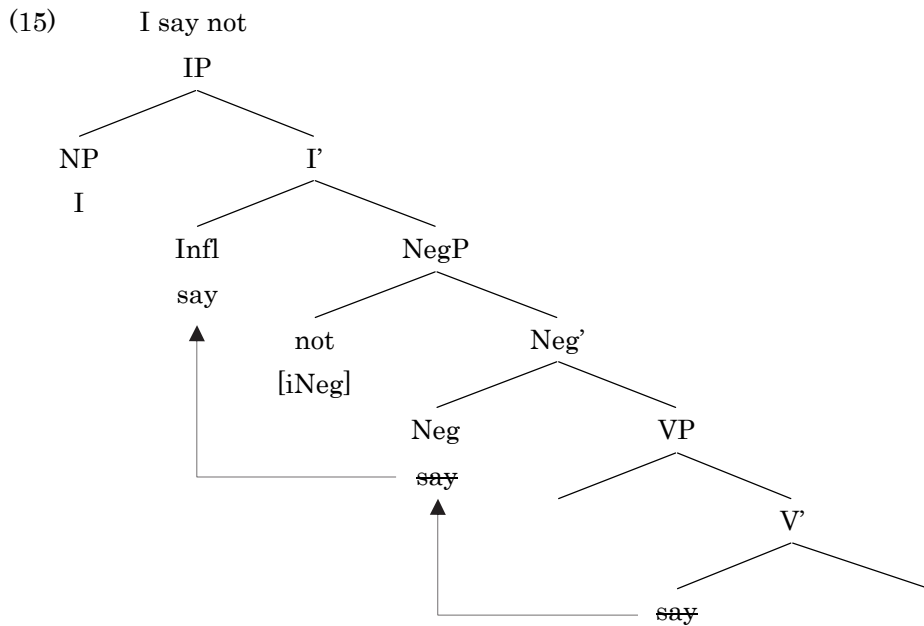
(13)の樹形図では、Neg 主要部に *ne* が、V 主要部に動詞 *secge* が基底生成され、動詞が Neg 主要部に移動し、Neg 主要部にある否定辞 *ne* と併合して *ne secge* を形成する。さらに、*ne secge* は I 主要部へと繰り上がり派生は収束する。ここでは、*ne* は[iNeg]素性を持ち、単独で否定の意味解釈に貢献する。

ne ... not が現れる(11b)の構造は(14)のようなになる。



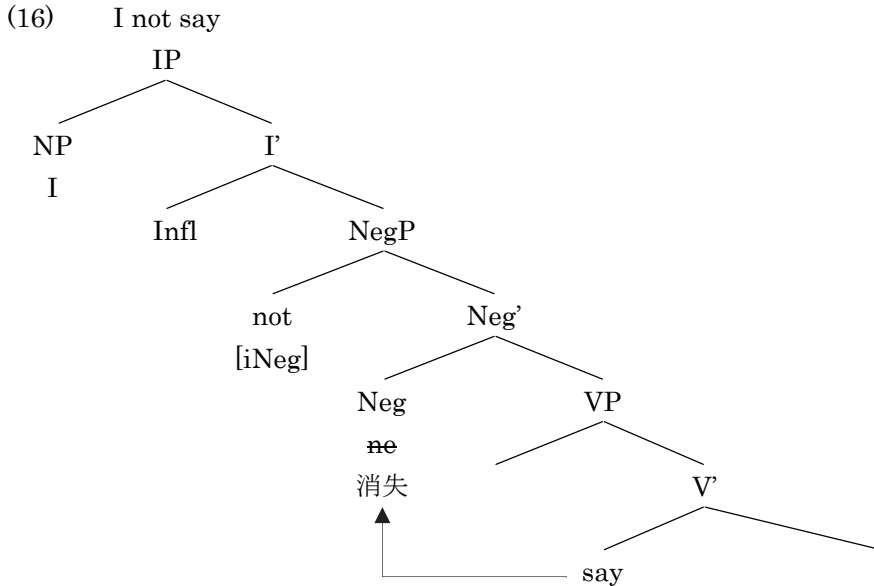
(14)では、Neg 主要部に *ne* が基底生成され、この時期になると *ne* が持つ素性は意味解釈に貢献しない[uNeg]素性になる。NegP 指定部には *not* が導入されるようになり、*not* は意味解釈に貢献する[iNeg]素性を持つ。*not* が NegP 指定部に併合された段階で、*not* の [iNeg]素性と *ne* の[uNeg]素性の間で一致が起り、[uNeg]素性に値が与えられた後、削除される。その後、V 主要部に生成された *seye* が Neg 主要部へと繰り上がり *ne+seye* が形成され、さらに *ne+seye* は I 主要部に移動し、I *ne seye not* という語順を作る。

ne が消失し動詞に後続する *not* のみで否定を表す(11c)の構造は、(15)のようになる。



(15)の構造では、否定辞 **ne** は消失しており、NegP 指定部に位置し[iNeg]素性を持つ **not** のみで否定を表している。この時期は、主要部は Infl まで移動しており、V 主要部に生成した **say** は Neg 主要部を経由して Infl まで繰り上がる。その結果、語順は I say not となり、派生は収束する。

最後に、**not** が動詞に先行する(11d)の派生について考察する。(11d)の構造は(16)になる。



(16)の構造は、基本的に(15)と同じであるが、異なる点は、V 主要部に生成された動詞 **say** が、Neg 主要部までしか繰り上がらないということである。^{iv} その結果、派生される語順は I not say となる。ここでも同様に、NegP 指定部の **not** が否定の意味解釈に貢献をする [iNeg]素性を持ち、否定文として解釈に貢献する。

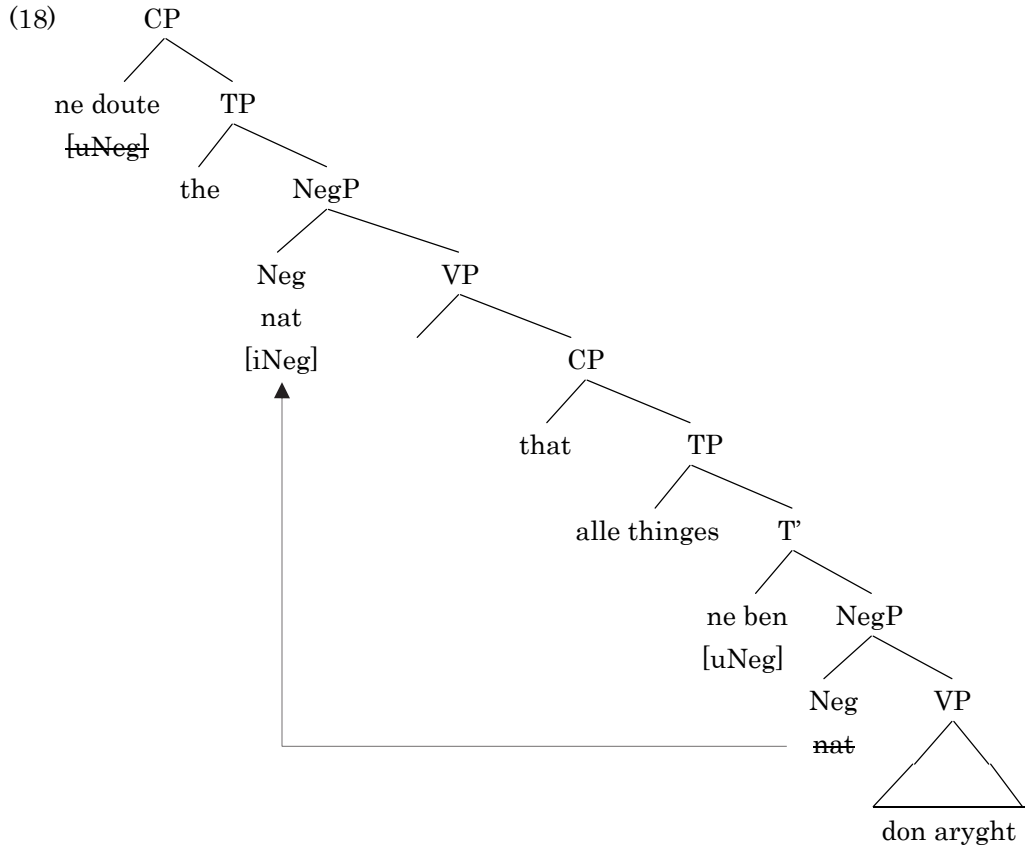
次に、Wallage (2008)の分析で問題となっていた、(17)のような、余剰な否定の **ne** について論じる。

- (17) ne doute the nat that alle thinges ne ben don aryght
 NEG doubt you not that all things ne are don rightfully
 ‘Do not think that all things are not done rightfully’

(Chaucer’s Boethius IV P5:49) (Wallage (2008: 671))

(17)のような余剰な **ne** を含む文において、Wallage (2008)の分析では、**ne** が持つ[uNeg]素性は、それより高い位置にある **not** の[iNeg]素性と一致関係に入ることができないという問題があった。そこで、本論では、Fillmore (1963)の否定辞繰り上げ(Neg-raising)の考え方を拡張して、独自の分析を提案する。^v 具体的には、(17)のような余剰な否定辞が補部節内に現れる構文では、主節の否定辞はまず補部節内に基底生成され、否定辞繰り上げに

よって主節へと移動する。そして、元位置にある否定辞のコピーが PF で余剰な ne として Spell out されると仮定する。



(18)では、補部節内の NegP 指定部に基底生成された not が、主節の NegP 指定部に移動している。そして、補部節の NegP 内に残された nat のコピーが PF で ne として Spell out される。Wallage (2008)では、余剰な ne は[uNeg]素性を持つ要素として分析されていたが、本論では、余剰な ne は、[iNeg]素性を持つ not のコピーの Spell out であるという点で異なる。

また、Wallage (2008)の分析にとってもう 1 つの問題となる(19)のような余剰な ne を含む例についても、否定辞繰り上げと意味解釈の素性によって説明を試みる。

- (19) Jesus hire þo for-bed þat heo attryne ne sceolde
 Jesus her though allow not that she bind ne ought ~~not~~
 his hond ne his fet
 his hands or his feet
 ‘though Jesus forbade her to bind his hands or his feet’

(ca. 1275 Passion 581 in OE Misc:53)(cf. Wallage (2008: 665))

(19)の例では、禁止を表す動詞 *forbid* が主節にあり、その補部節に余剰な否定 *ne* がある。禁止を表す動詞 *forbid* は、*allow* と *not* に意味解釈の素性を分解できると考えられる。補部節内の *NegP* に否定辞 *not* が基底生成され、主節の *V* 主要部には動詞 *allow* が生成される。まず、補部節内の *not* が *V* 主要部に繰り上がって、*allow+not* となり、*PF* で *forbid* として *Spell out* される。補部節内に残った *not* のコピーは余剰な *ne* として *Spell out* される。

5. 史的コーパス調査

2 節では、文否定を表す否定要素の *ne* と否定語の *not* が、古英語期から中英語期にかけては観察されていた。本節では、古英語、中英語で観察される *ne* と *ne...not*、そして *ne* の縮約形をもとに、*ne* の消失時期を特定するため、コーパスを用いて調査する。

5.1. 先行研究の問題点

先行研究の問題点 *ne* の消失について、Jespersen (1917)、荒木・宇賀治 (1984) や Ishikawa (1995) では、15 世紀ごろに消失したと述べている一方で、Nevalaine (1997) や Wallage (2012) では 16 世紀まで否定要素 *ne* は観察されると述べている。先行研究は *ne* の消失時期について統一していないことが問題点として挙げられる。

5.2. 研究の方法・目的及びその結果

ここでは、中英語と初期近代英語の史的コーパス PPCME2 と PPCEME を用い、中英語、そして初期近代英語の韻文、散文で見られる、*ne* と *ne...not*、*ne* の縮約形をもとに、*ne* の消失時期を特定することを目的とする。また、この 2 つのコーパスから得た結果は、文脈の依存はせず、等位接続詞、副詞のデータは省いている。ここでは、①*ne* のみの分布、②*ne ... not* の否定呼応の分布、③*ne* の縮約系の否定呼応の分布についてコーパス調査を行い、以下の Table 1 の結果を得た。

Table 1. 否定辞 *ne*, *ne...not* の分布

	ME1	ME2	ME3	ME4	EME1	EME2	EME3	合計
① <i>ne</i> のみ	1633	942	414	54	1	0	0	3044
② <i>ne...not</i>	762	621	298	10	0	0	0	1691
③ <i>ne</i> の縮約形の否定呼応	825	116	172	1	0	0	0	1114
合計	3220	1679	884	65	1	0	0	5849

中英語(ME)の時代区分は、ME1(1150-1250)、ME2(-1350)、ME3(-1420)、ME4(-1500)
初期近代英語(EME)の時代区分は、EME1(-1570)、EME2(-1640)、EME3(-1710)

Table 1 より、①*ne* においては、EME1 期までは実際に観察されるが、ME1 期から ME2 期にかけてその数は急激に減少している。そして ME2 期から ME3 期にかけては、*ne* が用いられる文の数は 942 例から 414 例にまで減少している。さらに、ME4 期になると、

414 例から 54 例に減少している。そして EME1 期になるとその数は 1 例のみである。次に②の *ne...not* の否定呼応の事例では、ME1 期から ME2 期にかけてその数は緩やかに減少し、ME2 期から ME3 期にかけては約半分に減少する。ME4 期になると、その数はわずかに 10 例のみに減少し、EME になるとその数は全く確認されない。③の *ne* の短縮形の否定呼応では、ME1 期から ME3 期では、確認される数は急激に減少している。そして ME4 期で確認されるのは 1 件のみである。EME 以降は一例も確認されない。

この史的コーパスの結果から考察できることは、次の通りである。

①の *ne* のみからは、その使用が EME1 期、つまり 16 世紀後期までは確認されているので、否定要素 *ne* の消失時期について、Nevalaine (1997) や Wallage (2012) による、*ne* は 16 世紀まで観察されていたという主張は支持される。

②*ne...not* については、ME4 期、つまり 16 世紀までに統語的な NegP による支配はなくなった。また、否定辞 *ne* の消失とともに否定呼応も消失したことについては、先行研究では言及されていないが、Table 2 より、EME 期に入るとすぐに否定要素 *ne* が消失したため、否定呼応も使用されなくなったと推察できる。

③*ne* の縮約形を含む形式は ME4 期まで確認されるが、EME 期に入るとその形式はない。そのため、やはり *ne* の消失と共に否定呼応も消失したと推測できる。

以上をまとめると、先行研究の間で否定要素 *ne* の消失時期が分かっていたが、コーパス調査の結果は、16 世紀まで否定要素は観察されたため、*ne* の消失時期については Nevalaine (1997) や Wallage (2012) の主張を支持しているように思われる。

6. 結語

本論では、英語史における文否定の変化について、特に中英語の否定呼応と余剰な否定辞 *ne* に焦点を当てて、議論した。否定呼応については、基本的には Rowlett (1998) や Wallage (2008) の枠組みを用いて、形態統語的な観点から説明を試みた。また、このような分析で問題となる余剰な否定辞 *ne* を含む構文については、Fillmore (1963) の否定辞繰り上げを拡張して、分析を試みた。補部節内に余剰な否定をとる動詞には、禁止・否定の意味を持つ動詞、主節の動詞の疑念の動詞では、*not* が主節に繰り上がり、元位置にあった否定辞のコピーが *ne* として Spell-out されていると主張した。最後に、*ne* の消失時期についてコーパス調査を行い、*ne* は 16 世紀まで観察されることを明らかにした。

参考文献

荒木一雄・宇賀治正朋 (1984) 『英語史 IIIA』大修館書店、東京。

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, M.A.

Chomsky, Noam (2000) “Minimalist inquiries: The framework (MITOPL 15),” *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-155.

Fischer, Olga, Ans Van Kemenade, Willen Koopman, and Van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge.

- Fillmore, Charles J. (1963) "The position of embedding transformations in a grammar," *Word* 19(2), 208-231.
- Frisch, Stefan (1997) "The Change in Negation in Middle English: a NEGP Licensing Account," *Lingua* 101, 21-64.
- Ishikawa, Kazuhisa (1995) "A History of Not: The Change from a Phrase to a Head," *English Linguistics* 12, 197-221.
- Jespersen, Otto (1917) *Negation in English and Other Languages*, Ejnar Munksgaard, Kobenhaven.
- Jespersen, Otto (1927 [repr. in Great Britain 1954]) *A Modern English Grammar on Historical Principles: Part V Syntax*, Routledge, London and New York.
- van Kemenade, Ans (2000) "Jespersen's Cycle Revisited: Formal Properties of Grammaticalization," *Diachronic syntax: Models and mechanisms*, ed. by Suzan Pintzuk, George Tsoulas and Anthony Warner, Oxford University Press, Oxford.
- Mizoguchi, Mikiko (2007) "A Historical Change in the Syntactic Status of Not," *Studies in Modern English* 23, 53-78.
- Nevalainen, Terttu (1997) "Recycling Inversion: The Case of Initial Adverbs and Negators in Early Modern English," *Studia Anglica Posnaniensia* 31, 203-214.
- Ohkado, Masayuki (2005) "On grammaticalization of negative adverbs, with special reference to Jespersen's cycle recast," *Aspects of English Negation*, ed. by Yoko Iyeyri, 39-58, John Benjamins, Amsterdam.
- Rowlett, Paul (1998) *Sentential negation in French*, Oxford University Press, USA.
- 宇賀治正朋 (2000) 『英語史：現代の英語学シリーズ第8巻』開拓社，東京。
- Wallage, Philip (2008) "Jespersen's Cycle in Middle English: Parametric variation and grammatical competition," *Lingua* 118(5), 643-674.
- Wallage, Philip (2012) "Negative Inversion, Negative Concord and Sentential Negation in the History of English," *English Language & Linguistics* 16 (1), 3-33.
- 柳朋宏 (2022) 「英語の否定呼応文における否定主語の分布について」『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 3』, 小川芳樹・中山俊秀 (編), 345-357, 開拓社, 東京。
- Zeijlstra, Hedde (2004) *Sentential negation and negative concord*, PhD Dissertation University of Amsterdam Utrecht: LOT Publications.

コーパス

- Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2)*, University of Pennsylvania, Pennsylvania.
- Kroch, Anthony and Ann Taylor (2004) *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English, First edition (PPCEME)*, University of Pennsylvania, Pennsylvania.

-
- i Frisch (1997)のコーパスデータに関する問題点の詳細については、Wallage (2008)を参照のこと。
- ii Rowlett (1998)では、否定辞が持つ否定の素性を[+NEG]としているが、これはLFで否定の意味解釈に貢献するという点で、Chomsky (2000)での[iNeg]と同義であると考えられる。
- iii Probeとは、探査子のこと。Chomsky (2000)では、一致(Agree)という統語操作を仮定している。一致関係を結ぶためには、解釈不可能素性を持つ探査子(Probe)と目標子(Goal)の間で素性照合が行われ、双方が持つ解釈不可能素性が削除されなければならない。
- iv この時期には、主要部移動は無くなり、Vに留まる可能性もある。
- v Fillmore (1963)では、深層構造における従属節内の否定辞が主節に繰り上がるという変形規則を仮定している。しかし、深層構造が破棄された今日の生成文法理論では、Fillmoreの変形規則を用いた説明は説得力に乏しい。この点については今後の検討課題とする。